

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月7日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06788

研究課題名(和文) ロラン・バルトの文学理論と言語行為論の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Roland Barthes' Literary Theory and Speech Act Theory of the 20th Century

研究代表者

守谷 広子 (Moriya, Hiroko)

東京藝術大学・美術学部・助手

研究者番号：40783204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ロラン・バルトの文学理論と近・現代の言語理論、とりわけ20世紀欧米を中心に議論された「言語行為論(Speech Act Theory)」との比較研究を通じて、バルトの文学理論を新たな観点から考察し、解明することを目的とした。本研究では、バルトの文学理論に関する網羅的な調査を行ったうえで、関連する同時代の言語理論をピックアップし、双方の影響関係を分析した。これによって、文学をめぐるバルトの言説の根底にある言語学的基盤を体系化し、新たな観点からバルトの文学理論の解明を試みると同時に、一批評として扱われてきたバルトの著作を学術の対象にまで高めることを目指した。

研究成果の概要(英文)：The aim of my research project was to clarify Roland Barthes' Literary Theory from a new point of view by comparative study of Barthes' Literary Theory and Speech Act Theory of the 20th Century. In this research, I comprehensively researched Barthes' Literary Theory, picked up related contemporary linguistic theory, and analyzed the influence relationship between both sides. I systematized the linguistic foundation which is the premise of Barthes' Literary Theory, tried to elucidate Barthes' Literary Theory from a new viewpoint.

研究分野：文学理論

キーワード：ロラン・バルト 文学理論 言語行為論

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでロラン・バルトの文学理論を対象とした研究を行ってきた。その過程で、エクリチュールやスタイルといった概念とは対照的に、これまで殆ど論じられてこなかった「形式 (forme)」概念が、バルトの文学理論の成立において重要な役割を果たしていることがわかった。それと同時に、この研究を通じて、バルトの文学理論と近・現代の言語理論、とりわけ 20 世紀欧米を中心に活発に議論された「言語行為論 (Speech Act Theory)」との関連が十分に論じられていないという問題点が明らかになった。これによって、文学をめぐるバルトの思想は、学術的対象として体系的に扱われることがないままであった。

文学研究の歴史において、バルトの文学理論は以下のように位置づけられている。まずバルトは、19 世紀中頃以降、文学作品の解釈において主流を占めていた「意図主義 (Intentionalism)」、すなわち作品解釈の正当性を現実の作者に求める思潮に対して、作品を「作者と読者とのコミュニケーション」という観点から捉え直した。これにより、作品成立の基盤に「読者」の存在を顧慮した新たな文学研究のあり方が呈示された。また、作者と読者とのコミュニケーションを意図したすべての書き物を「文学」と捉えたバルトは、文学研究の射程を狭義の文学作品から「文学的なもの (the literary)」全般にまで拡張したと言える。

それと同時に、バルトの文学理論には、それが読者の主観的な解釈を容認する相対主義であるとの批判も加えられてきた。すなわち、バルトの文学理論は、作品解釈において作者を等閑視し、読者を特権化する「読者主義」であるとの指摘である。また、これと同様の理由から、P・de Man や J・Poulet も、バルトが「反・歴史主義」であるとの批判を加えている。このような批判は現代においても根強く、G・Didi-Huberman や D・Lodge といった現代の著名な哲学者、文学研究者／作家も、同様の観点からバルトを批判的に捉えている。しかし、以上の批判が生じた一因として、それらが特定の文献のみに依拠し、とりわけ、バルトの文学理論の前提とされるべき言語学的思考を顧慮してこなかったことが挙げられる。

以上の背景を踏まえて、研究代表者はこれまでに、(1) バルトが用いる「形式」という語の使用法を文献学的に調査、体系化し、(2) 「形式」概念の成立における言語学の影響の一部を指摘した。さらに、以上の成果を土台にして、バルトの文学理論が読者を特権化した「相対主義」ではなく、むしろバルトは、作品に固有の「形式」を付与することで読者の読みを間接的に方向づける「作者」の役割を重視していたことを明らかにした。それと同時に、2 に関する調査は継続していく必要があり、とりわけ、言語表現の解釈に

おいて、その言語学的な意味以上に、それがコミュニケーション行為にどのような影響を及ぼすかを議論した「言語行為論」の観点から、バルトの言述を見直す必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、(1) バルトの文学理論と言語行為論との比較研究を通じて、(2) バルトの文学理論成立の基盤をより広い視点から考察し、解明することである。バルトの文学理論の根底にある、文学作品の「メッセージ」がその「形式」を通じて「いかに」伝達されるかという問題意識は、言語活動の「行為遂行的 (performative)」側面に主眼を置く「言語行為論」のそれと共通している。文学作品を対象とした言語行為論の目的は、読書行為を通じてなされる「コミュニケーション」の様態を解明することであり、この議論の中心には、J・R・Searle が述べている、「言語学的単位にすぎない文を言述の〈状況〉に結びつける能力 (構成的規則)」としての「コミュニケーション能力」の問題が置かれていた。同様にバルトにおいても、「形式」を通じて作者と読者とのコミュニケーションがいかになされるかという点が議論された。このことから、バルトの文学理論と言語行為論とは共通の問題意識に基づくものであり、双方の比較を通じてこそ、バルトの文学理論の独自性が明らかになる。

以上のような、バルトの文学理論と同時代の言語理論とのシステムティックな比較研究を通じて、バルト研究に新たな土台を提示することが本研究の最終的な目的である。バルトの思想を「統一」ではなく「変化と差異」によって特徴づけてきた従来のバルト研究に対して、バルトの文学理論の根幹に理論的統一が認められることを論証することで、従来とは異なった観点からバルトの思想を捉えることが可能になる。

### 3. 研究の方法

バルトの文学理論と言語行為論との比較にあたっては、以下の方法を採用した。(1) 言語行為論に関連する資料の収集・調査。(2) 1 の中からバルトの文学理論との関連が認められる資料を選択し、双方の類似と差異を文献学的・思想的に明らかにする。(3) 2 の成果を踏まえて、バルトの文学理論の再構築・再評価を試みる。

研究代表者は、第一に、J・L・Austin にはじまり J・R・Searle において一応の体系化をみた言語行為論全体、さらにはそこから派生した現代に至るまでの言語理論の網羅的な調査を行った。そのうえで、バルトとの影響関係が指摘される言語理論を選択し、双方の比較研究を行った。

以上の文献学的調査を土台にして、従来の

バルト解釈に修正を加えた。バルトの思想にみられる言語学の影響を体系的に論じることで、バルトの文学理論の歴史的な位置づけとその意義を明らかにすることが可能になる。これによって、従来の研究が評価してきた以上に、バルトの著作が理論的論証に耐え得るものであること、また、それが文学研究の歴史上で果たしてきた役割の大きさが証明される。

なお、以上の作業にあたっては、単に言語理論の古典にあたるだけでなく、最先端の言語理論と文学理論とを調査し、バルトの思想が現在までにどのような影響を与えてきたかも顧慮した。具体的には、バルトの思想の言語学的背景を考察している T・Todorov や T・Samoyault らの研究、さらには遡って、R・Ingarden や W・Iser らが構築した受容理論も本研究に関係する議論として調査の対象とした。これらの資料の収集調査にあたっては、この分野の議論がもっとも盛んな欧米諸国での調査も実施した。

以上の文献学的調査に加えて、本研究では、社会学や教育学といった他分野でなされている「文学」をめぐる議論も参照し、現代における文学理論の射程を明らかにしたうえで、バルトの思想の現代的意義を追求した。その際、「文学」という広範な問題圏を取り扱うことになるため、研究の対象範囲を「文学」と「コミュニケーション」との関係性を議論するものに絞り込み、各議論がなされた背景を十分に顧慮したうえで、バルトの文学理論との関連性を探った。

#### 4. 研究成果

本研究においては、第一に、J・L・Austin から J・R・Searle に至るまでの言語行為論に関する基礎文献の調査に加えて、R・Ingarden や W・Iser らが構築した受容理論、さらにはそこから派生した現在に至るまでの文学をめぐる言語理論の動向を調査し、アーカイブ化した。この過程で、フランス国立図書館やロラン・バルトセンター等での調査も行った。

上記の調査を土台にして、バルトの文学理論を言語行為論の観点から基礎づけた。バルトの文学理論と言語行為論との共通点は、文学的言説が既存の言語システムから派生して、そのシステムを超えた「新たな意味の次元」を生み出すのはなぜかを議論したことにある。バルトにおいては、この「新たな意味の次元」を解明するための対象となるのが「形式」であった。同様に言語行為論も、文学作品が持つ意味を「言語学的意味」や「意図主義的意味」によってではなく、それがどのような「状況」の中で生じてくるかを考察した。このように、両者は同一の立場から文学を捉えているが、その際にバルトは、言語行為論の論者 J・R・Searle の理論を直接的に参照している。ただし、バルトはこの

Searle の理論を乗り越えるかたちで自身の理論を構築したと言える。Searle は最終的に、「文学」は作者と読者との間に生じる「特殊な効果」によって条件づけられており、それを純粋な言語学的対象として分析することは不可能であると帰結する。これに対してバルトは、文学作品を言語学的分析によってではなく、形式的分析によって明らかにすることで、Searle がいう文学の「特殊な効果」を正面から論じることに成功している。これが双方の相違点である。バルトの場合は、文学の本質を形式的分析から明らかにすることで、言語行為論を乗り越えるかたちで自身の理論を構築したと言える。

本研究では、上記の比較研究をふまえて、バルトの文学理論を新たな観点から捉えることを試みた。この作業は、バルトの思想を「統一」ではなく「変化と差異」によって特徴づけてきた従来のバルト研究を補うものである。バルトの文学理論が言語学的知見を土台としており、それによって、そこには理論的統一が認められることを論証した。さらに、以上の成果を文学理論の領域のみでなく、社会学や教育学の分野でなされている議論にも結びつけた。一例を挙げるならば、近年、教育学の分野では、「コミュニケーション能力の育成」が重要課題の一つとされる中で、「フィクション的なものしか教えられない」文学的要素は、コミュニケーション能力の育成に不要であるとの見解が呈されてきた。このような見解に対してもバルトの思想は、文学の役割が、言葉の言語学的意味を教える実用的教育とは異なることを示す有効な手立てとなる。

このように、申請者は従来のバルト研究の枠組みの中でバルトの文学理論を再評価するだけでなく、その思想が持つ現代的意義を広く問うことで、バルト研究の発展に多方面から寄与することを目指した。近年、バルトの写真論や美術批評は他方面から注目を浴び、再評価がなされているが、文学理論に関しては、理論の不徹底さが一因となって、学術的对象として扱われることが困難とされてきた。本研究はこの問題点を解消するものであり、それは、従来一批評としてのみ扱われてきたバルトの著作を学術的对象にまで高めるという点において、意義あるものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①守谷広子、「ロラン・バルトにおける「古典」の概念—初期批評作品にみる文学理論の萌芽」、『カリスタ』23 巻、査読あり、2016 年、1-20 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守谷広子 (MORIYA HIROKO)

東京藝術大学・美術学部・教育研究助手

研究者番号：40783204